下巻

佛説三部抄

上 仏説大杭
末 四季念句

中村俊定文庫
文庫 18
85
3

俳諧三部抄

上　俳諧大概

末　四季発句

内閣文庫

俳諧三部抄

中村俊定文庫

秋部

初秋　　野原西鶴

是ばかりの風の吹やうにそめて秋

志賀後あ

るの耳も七夕ぶるきぬ秋の風

伊木西休

秋をうゝゝとあんしてあるる文月ふ

手升令真

文殺ぬむ季やといふ文月風

一茶ふ　　宇治丈曲伯

水ちきに舟をやる風の一茶ふ

月新も初舟よ棹さし一筋ハ　　高橋一登子

風のうらふい事はつ一ふかハ　　坂部胡八子

秋をのせて舟ちんとぬ一ふかハ　　小田氏桃風

脱すや桐の葉ふの風ふろ　　雜賀有弁

ひん水やねての釣けの秋の夜　　水田西吟子

さすり此海のこゑ風ふ夜の夢　　高橋清流

夜ふよ木ら海ふちめすを釣の夢　　梨球和尚

山市時嵐の孫賢ふ

一叶狂帳中

竜の夢皮肉の時あ一ハ

奈市伽及上悔釋教猟吟

産滅の気の志ぼくを神の夢

七夕　　志賀と一直

彦ちいもめ一和すふ女七夕　　横内氏赤紙

ふ一ねをねふの張河ふ

七月の歌源氏の蓮説きて

あひはいつまの花はかつ星　丹上氏常之

なつかしてたれかあくへきたゝみかな　大お意秋

祝祭　丹陽氏由や

聖霊は仮や取あへする向山

灯籠の影つゝへの水や灯籠影　沙門法雲

光明の木のかりもれや灯籠影　田渕氏屋宇

新宮し名を暁天よ灯ろ　石田孟水行

万燈会　丹上氏常之

月よいつゝ一万由旬あけ灯籠影　吉野寺中

やしやあるさもつて灯籠影　伊藤政章

久目やあるさをかさゝ京灯ろの火　七灯籠影　一時野性中

もゝあるぬ鈴もいつも新灯ろ　蓮仮　和上氏抱友

十万無量寺やとゝ紅はすのめ

宮ゝを見て伊木を休

蓮の仮い書ゝ蓮の手向水

生身魂　　兼岱義解

ち鯖やせをふと宮やうの生才記

坂部胡兮

心さの〜魚鳥をこれも生才〜海

霧　　三宅国久

大ふんう霧の海はいもふ

一面行伝あ　梅翁法師

長船のこちわれをこ霧の海

お撲　　木畑氏定直

小ふ魚へあふ〜ふるす面ひ小

市お鉄丸ふ

立あひて余うもをひ〜くお撲小　　玄甫法師

打こもうを見つも扱お撲　　丹原氏台菴

お淀

宴お撲けふ淀鳥羽まみ　　梅翁法師

　　碧　　林氏法下遠春

碧ふの　拍ふも都(トドン)曇灯ち小

月の秋や天照すおんいせ理　　伊木氏西休

　　万代栄宣

ふふさんそひちひさ〜ち木曽碧

市村秋丸子

ゑ柏子ハほとゝぎす木曽おとり

三梅氏好左

ゆくゝやセ孫となりて木曽おとり

一村軒惟中

雁子や夜の玉ゑまの丁の声

女郎也　　出賀中

名まて我をもおもはゝ女郎也

近原忠後

めのはゝをもぬけて女郎也

秋山樵失

男山の風はおるゝやをゝふし

馬場京浦

人間のおもねちゝぬゝ女郎也

羽原氏忠之

乃のへのうゝゝわゝゝや女郎也

宮滝益翁

三のかや風をゝこゝをみちゝし

お上氏梅友

も入や海ゝゝの乃床の女郎花

宇宮めゝ

むゝゝ栗ゝ入ふまひをゝちゝし

雑波宮玄

むゝゝ栗一仮芋や女郎也

れ家よりそとて出ぬる女郎も　　澤菴和尚

板家よりみそんとうとおもふ女郎も　　一時行脚中

清

出て穂ゝはぬ女郎花　　万代常宣

小萩はぬ坊主あるぬかもすき　　安藤義解

家白ゝれやれ尾もう神くゝ　　伊木氏正休

取柴　　池田豆休

くゝすやる取柴ふゝる大唐米

イ　四山　　山是一竿子

ちゝ山やうし心のべる取柴　　藪野宗正

おのゝこれいトアも取柴の笑のゝ　　安竜左全

酒やあゝし取柴ちゝはゝの八

一時行脚先生ゝ

悦ま

是山のいろはもさゝゆゝ女

名本のもみち　　石田益水軒

れの梅のもみちや二ゝゝ先

蘭　曲肱斎有中

慰ゑう孤江てらすや山ち褄　津田安岡子

菊

陶りのち皆そうさんと菊の酒　志賀後直

荷陰孤邨一束菊也菊乃酒　河合城中

香りき香や久んなり菊の酒　曲肱斎有中

世々すへて重陽ゑ入や菊之酒　一葉斎井中

あ〜菊のかそうき也酒のうん

月

月代やあらめ拾てゐる　みくま貫

西岸にそうて入なり月乃弓　長谷河秀盛

はれ沢も直きやあくる月ゆう　そお氏義竜

うけてみる弓張月う酒ひとう　百えんあるを

天の星はふいいるまうの月　よみ人不知

一時秋飾お　杉山氏政也

如　如れて寝あいふ〜の三三の月

秋をとゝむ月はさんせん世界ぶ　　院坂朴之

屋句や月迄つゞくのあんしゝ　　秋山樵堂

恐ふゝ月やわゝはゝ乃友　　芦氏国女

そやおやち月ハ玉子ゝ茶の家　　今村義竟

拾弁も月にい出し世間信　　近海法師

すみよしの入句ふゝぬ月も系　　新床定之

弁ようつる月を拾くそねつゝ　　丸河位秋

然ゝ月月にく富ふき山法系　　平み令真

さゝ月もけゝたいぬ家の月見ぶ　　安蔵号の

提灯もわれてやけき月見系　　前川申平

輪さちもや天下をめ原月七笠　　今村義竟

水精ら玉桐千よゝ乃月　　徒井光貞

蛾のまゆ数さへ見ゆる月哉　　難波　言長

為くるまされく自今日よ雲　　松江氏迫吉

さゝりたたひろけ雲を月に雲　　角南貞固

為ぬ心ろて寒き月よ雲　　言末　釣舟

梨をあくすりふる月に雲　　坪井氏正之

眠さ尚す月も京木の花ふ　　一扇　狩人志

吉田芥舟

年の尺の声計や月の舟　　加茂野武

山彦ひとこゑひとこゑ子持月　　大阪　教甫

あり屋よもえいなれ子持月　　曲肱軒有中

砂糖より白やあまんす寒月夜　　秋山雄芝

箸よりやさむ枕間の寒月夜　　市村鉄之子

西橋よ入もの入れも月哉

お出月　伊木氏正休

ちよろもむあけのぞとの月

お松殿

地たゝまて浪よあゝすゝ月ゝ海

此白ハ仙屋の主後とゝん

名月　高木四方武

名のりそ抑是ハあきの月

松原感休

さゝし世界の富もそれ秋の月

詩仙堂よりのぞて

明山下ゝ山

詩の新の〳〵うゝめせ秋の月

梶山保友

新しき月ハ上戸のさゝ小

樽内未のの

十六夜ハ壺の入山ふし

有松文樽子

名月ハ特もさゝあやゝの雨

多田清吉

是やけ十五のゆひさすはまの

十六夜　秋山樵夫

三十夜ハ遠くゝひきしもの月よ

九月十三夜　木下羽古

月ハ二度ちきるゝ夜の十三夜

於倚松学校音楽ありけれ

高知正家

楽をまなび十有三の月見かな

井口如貞

冬はつき網らや湖より一夜の月

千葉常仲

十よ三つやとゝすや宵の月

福原峯松

栗まてもろまぬのちの月見かな

山口鬼や

いが栗の手にはとられぬ月見かな

辻氏自取

なかむらや千さと月ふる二月の朋

雁

有松文枕子

雁の羽やあさき一斤の雲をきく

月の入て消ゆやかゝ雁乃文字

兵務巳石

あの葉やゆらへらのゆかく

賀古信有

一つら居やなかく際雁の文字

矢野重ん

初雁やまさ文もとぬ半眉存

井板松翁

下りと人て眩(エリ)せんうく玉ゐかな

小春日

芝山茸やもめつる野べの小春日　竹下氏　竹子

しらはけやたゝかの〳〵のうつゝ　宥和の頃

立われいま紫の中やうつゝ　伊木氏　西休

穀生やいれぬの〳〵のうつゝ　山中休菴

さいふるや小春日和の切のむすき　子紫　常仲

鹿

鹿てくり鹿のふゝ〳〵料理酒　藤原俵子

大根の葉こふ鹿の料理ぶ　水野永頼

我ゝにはゝとふ〳〵や留る鹿　伊木氏　休

あるとみ書にてむ格や鹿乃ふゝ　藤原秀倫

お宇治

とゝはきけ紀の辰巳鹿乃声　山口氏　時非

桜紛

庖丁のねよちめ〳〵んもみちふゝ　大内氏元

雨ふりに海やとつる石紫ふふ

ぬるあへうまる紫陽の桜ふる　池田豈休

れ家のとるまるふるくんもちふる　雀氏百時

一口や下紫のくすもみちふる　市村洪丸

京の紫えへ移るとれば紫ふる　伊木正休

お紫ふる魚籍立ふりきふ　竹下竹子

てつきうや鄙の名ぐる枝ふる　みゝすゝ

かくらあへやむくこに見ゆる桜ふる　一時狂惟中

もゝ火　西野氏一云

時しぬ雲ふる角のもゝ火ふ　高滝益雄

もゝ火角ゑまぬる折ふれ　志かえと直

口京ねちり立るもゝ火ふれ　美蓑苦　佐木弁中

ゆくに秋の芋ふるとふ　伊木正休

賑ハ原氏のちりや芋はと

はめても多よ松そう芝くもこと　山見梨葉

芝くはこくろのみーきき世ふ　大平直仍

松茸

松けよる代をの〳〵り茂習油　古地壺菴

松けい芋を中のれる粉食ふ　菊原言周

十代のむそ松茸の匂ひふ　安田氏の全

昔色料るに〳〵音も松のあしふ　秋山雄光

松茸やあるよとみしかれ笠　安河氏一隅

山芋

その精をけよ山　里山れいも

かくれ家や法くぬ山乃芋　宥利可弱

三宅周菴

其根法く源を山のいも　吉田忠昭

坂出すや根よけまゆ新山の芋　鳥野直継

存れ根ひすくようふし山の芋

木実

栃もみて水のあり榜　羽心大僧都

あるむにてうめせぬ熟柿ぶ　来門正引

いら栗もわるかねとてきや　沙門羽吟

水さるる風熟するや秋の梨子　子紫常仲

四十うち心中といすや水くるみ　木畑氏玄好

風是をとるを為せるる密柿ぶ　沙門羽吟

新酒

世帯て皆ふるる新酒ぶ　長谷河秀盛

板立ぶ門をもるーの新酒ぶ　行岳正直

雑秋

鶏はるるや海士の酒代の約乃子　山口氏昨非

死ぬ人ーれ日　大野利廣

声よついてとひれ百舌や目ふとり　名四十うち

時やきて鳥いもあるハ秋ずひ　雑賀有巾

秋山樵史

上洛和歌

撰見する公用の秋乃久ふ　石明清

早稲映稲うゑ初る沼水　伊木氏正休

あさ出めと人よハ告よ山のゐる　石田氏盈水

あと米殖るゑハ日記久ふ　藤原貞固

新そとそちふあゆけハ法流ふ　行

行ふ扇うゑ初のあきやけハ　を義原義

お稲荷社　北見嘉象

是やみて美ふあゐる赤のめ

大武蔵の心を　梶山保友

むら雲の景あゐ久ふ秋ふ

秋の月ハ一寸はしのすゐふ　伊木正光

秋の秋ハゐるこゑ　雑賀有弗

ゑ陽あゝひふ

秋の秋むり　曉却のおもひふ　古堂和尚

忍田氏勝正

秋ふのゐゐゐゐゐき風ふ

秋吟

柴門如流

蚊ひとつ　秋のふるひゝ

お雛波　山田清雄

三夕の寂てしをれし三津の秋

お方野　梅雨清

寂の世やかるる多の眞の院

梅雨惟中三吟

松山氏玖也

あるめよ三金掬て見る酒

一叶惟中

早稲わゝの白ふきいつゝ

さゝむ

俳諧三部抄

冬部

初冬

大僧都即童

菩提寺柳や登れるみち月

井上氏計

戸障子や引立ていふ神立月

三竜因久

ちゝとちゝけるもやるふ月

神祇

かねの緒や紙張るる神無月

吉沼氏一登

一枝よあひて男我大盜

親類やうやまふよつて神立月

時雨

かゞ法師

栗のアやちゝひる微風屋模一時雨

辻氏角取

松風よたゞ生をうゝふゝれ系

砂子形巾

軍の杉よ一本さすら時雨ル

羽吟法師

松樹海ちよ名ちゝさゝれ

勢州不口

あひ笠やわれな仏ひとゝき一時雨

京河原安孫

時雨や自すつて鼻を沖毎月

三橋吉道

わゝ左根よ時雨そかゝゝむすめ

栗門野雲

木の葉ふちる宿ハゝかハ時雨ル

金也地蔵世

笠も名ル

よしお山の夕時雨

お西宮

永舟菴加交

宇治山や時雨もハ千の実めくり

お釜比良

高砂一笠子

象駒山ゆゝ白い鼻乃ゝれゝ

ゝゝやくしとゝふゝ色

ゝゝて

定ちき時雨を定規とやせし　榎野氏永仙

芝茂や風の中なる虫くひ葉　竹下琥付

如孫子木の葉うきあるかな　市村氏秋花

雨と閉て初て木なる蔦紅葉　大森之丸

木ちしる搗ぶ木となる搗ぶ　池上元定

風ふのつて羽うつハ木の葉天狗ハ

木畑定直

天狗ふ成し木ハ是ふあて蔦紅葉　河合鄙中

止悼

風ふちむ僕ふ力も蔦紅葉ふ

伽羅の木ハ匂ひふ多や　高野朋之

物冷やふ　あとふ　物も

葉も　即童庵

葉ハ花や面白ふ居ハ　伊木正休

葉ふあれ玉ハつふ　伊木正休

水にあきい於安やのみしら雲　大夫氏之を

氷　沢村氏宣治

かるいふ者あるぬす屋哉

氷てい音もちやりう　野村武玩

雲　北庵河

くんちをや暁ひて雲けら　高滝益義

ちるいて角うちくろ雲柱　不雲居士

ぬりうぬの重きうしの雲枕　大賀中中

雲よ雲のあいわれの柏原ふ　今泉流理

お伝吉　脇坂朴之

伝のにのうす彩文ら松の雲

一時好亭　松江雅舟

岩山よ腰のさぬ雲乃も高ふ

雲　井上長時

かるくや梅かちてくふの雲

孫にのち紀のあるや雲つあて　仁口清師

秋山樵夫

時ぬ連くちなれやふ二の雲

山のくもこそ白雪の雪　　常原正伯

ふるしぬるやみのねぶる女　　渋口玩雪

はえぬ山やはるの雪女　　野口素行

ちりはもゆ山ぬとるや雪女　　玉屋東中

せをふるる雪のさゆや雪女　　前川由平

あるれい雪を山ぬ乃ゆるゆ

雪ぬ国久

ぬけさきに雪ぬくるはて雪ぬ山　　水野氏如水

ぬの柄やはるくるみる雪の山　　井上雪之

はむ雪やこ三十ぬ乃銀の山　　板野氏雪

高ト砂きあれとすまぬ雪ぬ庭　　脇坂氏在止

けさの雪ふみて白雪の庭　　野間美雪

雪よと鈍本屋にもきくはちをは

雪ふり名残木履の雪ぬぎ捨て　小見樂天

雪ふりてついてゆきけるきぬ　後藤秀倫

白むくも雪にはさまれ動かれず　星和昌陽

年末のめんもくなく雪仏　提宗和尚

くせ〳〵雪の明らの松ぶり　三宅國久

枝に雪姫松葉代への字なり　高野逸山

雪のもちれいそさそふ鼻ぢゆく　仁木氏百休

雪れ雪や竹さ一斤の門をはく　近原忠俊

あく〳〵雪をふむや白地の足大心　芦当紅在

窓白し雪や障子をはりつゝん　下の知志聚成

辞世　志星氏俊右

現在よみし世いつ〳〵行の雪　吉田尚幸

と悼

蔵乱す雪に紙色り人間世

かゝるさやぬるよりとへて月出の雲　泉郎子一三

かゝるきゝすゝめて船の雲もふる　蓑尾河船

横雲やえんくとてふの雲　雛賀有中

雲重し緑竹低りかきの骨

淀河のうて

豆腐く雲はらりん菓舟ハ　金也地九世

雲とみるゝきものゝ灰や香炉峯　子坊考仲

北河一色

雲もゆらりゝ岸や神鳴

一時行奥州松江維舟

北宮の雲さへあり障子ハ　一時行惟中

もとみるや雲林影天祝坊

埋火やほらしてさもの雲　山河氏利次

水雲

取り水くれ野乃あかり

俳諧の基石とふらて

よみ人しれ

ゝ浪のうつや基石乃浜　衛

郭公むやしの風宮こゝろあり　江田氏三義

水もぬかやうとゝぎす友の鳥　沙門鉄絲

郭公の絵や諸鳥無常乃ねの声　池田豊休

ふるゝ田地を動す郭公　一村行脚

せこの者共よわゝゝ郭公　山田氏至高

凝紫

郭公やあつゝすゝ雨降る前池　道池活右

郭公ねいやゝゝまれる小ふゝ　金也地百時

格子の下り水のあゝふれ　平野氏重之

味噌ひちてむすび水やこゝふる　神谷

神谷　野上百計

神谷ものやつゝおてゝおもゝき琴や笛　小林氏長之

冬酒

雪雨や是三無言の最酒　平野氏之

我よをいてうゝ陸やこうあれ酒

陰中よりのをかむやのれ酒　八木氏伊豆

くんぶへやつきておくちんあれ酒　山内氏秀次

酔さめる水あわ竜あれ酒　河合甚助

さらばよいふのかぶやあれ酒　小杉原半蔵

酒のよりのをきこうる瑞アボ　城国左衛

製酒者さやぐやさくのん

のれ酒よりやスムむ竜の水　金方月ま

大上戸ひろいぐ清ふん製酒　伊木五休

庭ちやむまぬけるあれ酒　炉火

れの木や是もひーやふをを炭　南枝作

炭をつきすれををこれすびつボ　西脇好有中

あさに出いろよりる山炭火ボ　平井くを

酒のんわきてふる炭火鼎　北見樂斎

と月乃うるにつけて炭火ハ　佐佐自悦

やきもす炭や根布冬の夕　勢多正友

くれてこうつふとんよ冬まち　〃　観僧都

是をしむひまあらて恋こつ　百元水色

眠花よ入るとみし火桶ハ　忘木四武清

炭のせうや宮のふきれ火ハ　大東次えも

老の坂我をいさむるこつハ　松原感休

きよらひよりふ白紙すみのぞう　一村好惟丹

紙ハ　賀古住有

ふみつけむろいるる紙こうふ　秋山樵史

漆ぬりて新紙ふこる紙ハ

一寺坂住乃僧無彩

あうれて

久の方へ屋をはく紙ゑ　乃親はし

手巾　　玉井うらと

きさゝ山うるうして手巾ゑ

食　　大玉直仍

者をうけす成よりゆられ紙ふすま

作木を突

木枕や四角かさ高れ寝の如すま

神扣　　矢野をに

靴袋ゑちゆるまゑはちゆ和

一時好惟井

うろひ屋名をやふゆ也れ沖たき

9

燥掃　　隠者迄秋

又生ゆ金くのわんすもひ

大もりえ吉

篇ゑ里民の居ゆ雲やすもひ

伊木ゑ休

ゆふかのむもゆぬ者ゑ燥掃

市お秋ゑよ

すもやゑ多少の梅豆紙ゑ

山田ゑ適

燥掃やもくよかゑ炭ゑれ

大根

横内ゑのり

からのものや者ゑめくるゑ大根

古大根そこをとりふしからのあ　言知氏家

小刀やあたらぬ次おろしに弄大根　秋山蕉史

木陰　梶山保友

きさらぬ山せきせき矢やさん木陰弓　丸河のふ祐

ねちわく、雪をあくらん木陰哉　秋山蕉史

うち陰や雪に鉄いの竹乃弓　秋野さとる

俳句　もちもい義を情まぬ嵐哉　言滝益翁

俳句を校うつすう嵐哉　めゆ流せし

鬼やらふ乃ヲニハいはこにかちん　南校せし

うるぬ先ニ金弁ふらく鬼の豆　丸河佐祐

ぬすひやうひろふ鬼の豆ねとし　伊木氏休

せもる知やらふ声々ハ鬼ぬ　除夜舟　市木狩丸子

鬼ぬとの宮（押出せ除夜の舟

よゝかくるい袖のこゝろと陳夜の舟　伊木正やス

大和ぶの沼くれわたる陳夜の舟　汐江の岸松

こゝろ山すいつれの猟て陳夜の舟　難波立ゝ

七十あまりしらゝ家舟　丸江の小祐

酒ひとつ呑るハ夢ゝとわすれ　一村狂惟中

くむ酒やそれとも波忘れ水　宗鑑法師

山蔵主

一夏のとてくしてそれ乞ふ　高志次

借衣や和物の羽ゝとしのくれ　栗葉呂法

借衣やあてもなきのくれ　一村狂惟中

へゝとゝまりて名れ乞ふ　[illegible]

雑句

鶴こひやわすとの矢のつゝ　清家朱木

二郎事よハ多くの袖をつゝ　汐江の岸松

高人あを稗の穂毛ふ　石田孟水

七夕のこる晩月の光り　鈴木氏紅笑

名れやのこる柳さへをあり　江戸ふ桜

小豆もちやわ砂糖の下もみち　丸海のふ祐

もちつきは朱をうハつる小豆ふ　伊木氏休

味ひいあはきるる雪や白砂糖　矢張氏

もゝひや京水ゝて餅のほを　伊木氏やた

寺餅の雪京を京るや板やうし　辻氏自取

茘湾やもゝひはみぬをものゝ　ふ的ぱし

茘湾や世男のあ間の柳ゝも　育人玄樂

お祝ち

膳の上ゝ年来一物ふ　清家氏朱木

食水の浪のうねゝ菜の巻ふ　肥お高俊

作者国名　付句数

讀人不知　古今

山城

花鳥丹景雅一　鶴丸西相一

連歌師宗長一　桜井永仙一

大德寺澤菴和尚一

靈山長嘯一　智證上人一

四明山下丈山一　勝尾菊丸一

里村昌叱一　同氏昌隆一

松永貞德二　松江雅舟二

同氏重頼一　小松重吟一

吉田松盛一　角尾仙船二

風月宗法一
山崎
宗鑑法師一　号弟月菴又号一夜菴
伏見
西岸寺住法師六
泉州堺
醫林芸友一　下の有志録成二
南氏元尺一　大井利廣一
河内
小松原宗昭二
摂州
西山宗柏翁十二　也昌坊文存一
津田休甫入道一　夕陽菴導一
松山玖也四　梶山保友五
伊勢松之翁一　言滝益翁十
前川由一郎七　井口如貞二
藤原貞明六　田氏言因三
丹波西翁一　宮野浄法一
金南九郎一
瑞野田
宥利可弱八
老泉
水田西吟二
伊勢山田

蕊木四郎武　三　光貞書　一
蕊木四武清　一　松尾二休　一
竹犬　一　爰二　不口　一
永舟菴加友　一　尤鳥　一
西河原弘氏　一　弘法　一
蕊木四武彩　一　孫原久昭　一
橋本鈴野
法華寺双吟法師　十二
双吟弟里鈴子　十歳　一
服坂朴之　四　田氏在止　二
藤田不涵　二　木下双古　二
百元水香　二　武久柳俳　一

二木光貞　一　高木鈴舟　一
吉田光重　一　田氏紫舟　一
綱平氏住
鈴寺聚禮和尚　一
栗加
佐佐自悦　一
平福
山海法師　二
赤穂
柏矢道智隠士　一
備前畠山
岳本松窓子徹及　四

伊木四休　四十　池田豊休五
寺地壹菴　四　吉野重七
子爵常仲　十三　山口時非十
賀古任有　十一　平野範孝七
山口道也　八　有松文枕
木畑定直　六　大村之秋七
竹下竹子　五　田氏常相三
田氏孫付　二　河合孫丹七
平野重之　六　宇治如雲五
八木伸重　五　松河定法五
大平直仍　四　藤原常好四
山田玉適　三　山河利信四

信輪寺聖重三　金毛地九世三
田氏正載　二　田氏正時一
竹屋重辰　三　羽原忠之三
藤巴秀倫　三　長谷川秀盛三
枚野只義　三　野上常之三
寒河長康　三　田氏自竹一
万代宗重　三　安藤義解三
東河原孫孫　三　如流法師三
不明法師　三　新木川英二
利光院羽心　二　吉知正家二
安宅左金　二　水野如水二
五十嵐吉子　二　上田常教二

清水定匡 二　中務由也 二
那須宗之 二　千原三條 二
伊木子賀 一　堂加瓜竹 一
田氏博夢 一　西木知白 一
黒田半成 一　水野永彩 一
石田長尚 一　黒屋甚蔵 一
鳥井貞清 一　野上長時 一
吉田吉沢 一　吉田吉沢 一
吉塚泰輔 一　黒屋吉蔵 一
安田の全 一　加納院英之 一
隱者浄林 一　石原西成 一
大福寺一計 一　志賀俊直 一
蜂屋折中 一

後藤勝正 一　萩原光重 一
山田惠之 一　中屋右菴 一
内貴好真 一　藪野宗西 一
西岡教甫 一　芳氏国女 一
一时狂惟中 五　田書 第罠 一

屋敷寺
金陵山弓親 四　竹岳西直 一
日下三子 一　伊原光明 一

斤上
志賀俊直 四　岸易晴 二
木畑玄好 二　石堂清師 二
小岡松風 一　田氏山子 一

五十村[illegible]貞 一
天城
角南貞因 一
佐伯
原氏[illegible]武 一
金山
江田[illegible]義 一
児玉
味[illegible]之 二
牛窓
垣氏[illegible]静 二
[illegible]場清張 一
小豆島

[illegible]伯 一
[illegible]部[illegible]心 一
佐野
秋山[illegible]文 十五
横田[illegible]
秋[illegible]蕃 三
沢[illegible]二
忍田勝[illegible] 一
矢田部
大[illegible]元吉 二
同氏[illegible]
上[illegible]和序 五
[illegible]上充定 三
同氏[illegible]吉 一
[illegible]辰 一
[illegible]兄貞之 十[illegible]歳 一
西[illegible]智
[illegible]信祐 十七
[illegible]十

佐木重賢 四　原吉直 二
阿部清師 二　也引隆者 二
水田
三橋吉道 五
浅口
三宅国久 六　孫学清師 一
新庶
定之 一　釋賀清師 一
矢陰
西沢 一　屋宇坊 一
芦寺
仁在 一　吉星作右 一

清水清師 二
佐野泉
多田清玄 二　寺尾義陳 一
小林長延 一　菊原正伯 一
竹内 一　光貞 一
鳥井直継 一
佐藤清山
市村秋九 六　小見繁家七
井上宗軒 七　清家朱木吉
栗原昌法 六　酒河春松 五
村上樹友 四　仙石秋口 四
近原忠俊 三　山田家之 二

吉原知足軒 二
野田の糸 二
河小吟 二
村新痴 二
樵 改長 二
多賀大理 一
山田知恒 一
一切一 一
小見一立 一
今泉氏 一
唐津書 一
武田一笑 一

今泉氏 一
小河一立 二
埴見岡矣 二
居酒一隅 二
南枝 法師 二
名勝巴石 一
加藤野水 一
大吾道友 一
の見氏 一
山家一笙 一
田中宗仲 一
[illegible] 一

城国庚子 一
福波
江田九郎 二
久世
廣田貞之 一
因幡鳥取
龍華寺提宗和尚 一
辻氏自取 七
野間繁出 二
安木孝彦 一
福田四氏 一
飯田利久 一

[illegible] 巴
粉河浪素 二
津田嘉岡 一
山本一元 一
[illegible] 一

伊勢米子
金方風子 五 業門ふぜ 三
今吾
高尾直久 一
雲州松江
二見一木 一
但州しら坂
蒲地治右 一
丹後
古堂和尚 一
武州江戸
民部法市左衛 一

高砂文礼 二 石田素行
吉野遠山 二 七波豫防 二
神田ふ貴 二 高野五志 一
一孤好洞和 一 吉野吟市 一
妹子業意 一 洲崎妖 一
石橋子 一 雲業子 一
宮和方明 一 東野一云 一
遠見和云 一 柏木源五 一
奥州
仙台宗護 一 雲在和尚 一
蒲州廣潟
松原感休 二

同防

宇都宮由的 一

老前中津

坂部胡兮 四

老侯府内

山田清成 七 玉井金吾 四

清部倍矣 二 今泉孫理 一

野村呂雄 一

肥前佐賀

石井如角 一 栗野明之 一

金子但他 一 素質 一

何所

鍋島侍師 一

讃岐高松

岩谷高也 四 泉郎子 一三二

雜賀有中 十六 佐木井市 七

板垣犯義 五 吉田芳舟 二

一扇軒竹志 二 坪井正之 二

伊藤改造 二 長坂高 一

板垣我言 一 辻重樹 一

村山則通 一 一之瀬明 一

砂子水中 一 永滝四郎 一

九鬼

高橋一登子 五

仁保

吉田忠昭　一　田氏尚宗　一

ちあ八日市

石田益水軒　八　山中休菴　一

河之口

玄甫法師　六　三宅周菴　二

田氏吉久　三

三沼

ちあ義堯　三　田氏義明　一

玄陽正辰　一　ちあ山法　一

中庄

坂上義鳥　一

西條

矢野宗法　二

俳諧之部抄

下一人唱

咋力今

岳山醫醫曾四季俳諧発句

一人百句

春部

元旦

大平をけうふ事也御代の春

節ゝ毎てもゝ代とえふく春の春

ひとつの椎まろれるやうゝみちち

午のとゝまる主春三旨の心伝

春ゝゝを植るとひやゝふゝ春

寛文七年冬十月

青蓮院尊證法親王

りゆみゝ余ゝ世ゝ伝奇

面白きまちあるふ市
廛表をかうふりぬ其四
乃とし試筆
面白きてんにさよ任て試筆
芳葉
七度迄てゝひけあゝぬ根元ゝ
菊　はゝ花七柚のうちな
まとゝふ字のちき心を
菊よまちふられを用うゝ葬
霞　お酒家具彩
酒の浪四十五尺乃嘉礼
惜が書写山へ系詰乃
うゝちあゝて旅ちける
日お伽ふ斤浦志賀氏
後直具彩
二三ゝ並ゝふゝ乃嘉ゝ
歌
けとゝゝてちゝらぬ花わゝゝ
野老
浮ゝ原不得ぬ野老あゝゝ
雉
うゝゝや角一井二乃ゝ七声
海老　仏ゝは山神社奉祝
伊勢海ゝや逆ゝ出ゝ乃海

百刀

百刀とれはつ宮の社等もろ

西鳳　古文遊する唐まて

ふ唐の詩と朱乃ふやけまて

胡蝶

錦と言て雲の夢ものもの法

猫の書あ意

書意て灰まなりふん男猫ル

蝶

ふよみま其様いやしろ蝶

春月

春の月や錦繡ほく猫ヒあ

春雨

山とりのあれはふやまの雨

二月廿

二月二日法華て見ゆる廿ル

梅朝

朝乃梅理ふむや梅の三ヒかね

梅

るに梅ふん七殿ふ遅さて

馬まつふん四五宗乃山の梅ち

名ホの春夜句言野出山

下宗まま

ふ賀の春あ子も猫ル梅ル

七

花を踏や浪のうねゝ水ゆくひ
やきめもあとゝれもふもゝ見ぶ

藤

ぬす人や沖は白波藤乃棚
汐干　住吉の浦にて

遊山舟行合の間よりゝゝひぶ
三月尽

ものゝ去ちるやさん〳〵九十日

夏部

更衣

きものの閑々ものぬひをふつゝ
新樹

青葉のさやまみしゝ夜ゝ
夜野

七才八分ゝの耳足原夜野ぶ
郭公

膳よ来ほとゝぎす松宇の杜宇
蚊やゝ子盗人きゝ所子規

新茶

新茶もゝ古き好物のゝ草
植田

早乙女のちゝをれぬ田ゝ

五月雨

日の光盈 眠られぬや五月雨

蛍

貪まにゝぬ火いづるほたる

蚊

日盛や一時佛在すみの隅

子規

ゐる水やうきぬ流ぬ舟乃舟

惟子

てゝ蚊よりくさめるつゝ布

お昌服奥行

涼尺ゑ新月と乃木ひゝる

蚊

蚊乃市にゝ家おゝふ紙帳ふ

納涼

をゝ記てゝ股ゝ動く水あゝ

水すゝしいさゝぬ火ゝ肥投茶碗

因み笛の家望丹氏

長悦亭真紀行

すゝ風もけゝつゝ蚊ちゝやゝ

凝藻

水すゝし清ゝいゝれのゝゝ

蠶豆子

書千差牛の汗ちん士用ゝ

薫衣香

かくさんや人いはんそしん忘香

秋部

一葉

背とて恨よハのくぬ一葉ふれ

七夕

七夕の逢をもいとく焚うれ

荻

荻の葉や又見涼風ぞうばぶ

萩　京を明亭まて

松れ雁舟の内の真行

野を押ハすねをもし萩の色

観月

さきいくふ三ぬ七曲の面影

理

上まて心の心よ紅へて伊勢おとり

伊勢理あ柏子まやや海とぶこ

七夕

芙幻さそハう筒の花火ゝ

菊

ほゝむ穂やとゆるものとハもすき

らよ

自のらんも他のらんも蘭の花

梨子

水ゐやぢくとてあきの風

山の芋

雷盆やうこきぬる山乃いも

芙蓉

かんらひやはなりしてめんの芙たちこ

鹿

山風や鹿の音おろす魚のこゑ

鶴

まるれくいい見るぬうつゝ

秋鳥

竹ぶよ入てをせとも出ぬ目白ゑ

お茶餅

大鍋や二月のむよりおもゐ餅

相撲

お撲切々三番めのゆふゑ

法前お撲ぞよかゝ所秋と白ゑ

捨衣

声八木の間よりなるまゝゑ

夜よあつて声八くてふきぬゑ

月

もち月や一口はゝもせての事

俗名牛物まるて

うし宮や出ふもろふとき海の月

酒部

とゝ酔ゆへの雨乃文上戸

新酒

ふるゝ井の水よりあぬ新酒乃

岑入

ぬけい是もらいのしぬの法岑入

菊酒

菊酒やこのもひ気仮菜

菊

一子寒し菊酒てのこ乳才菊

早稲

からうすや関の岩をわせ乃米

庚申を守れる庵まて

ふりき紅々さふる 家鶏カケの

鳥尾ふ

冬部

時雨

日よ鳥ぬれそめぬれ 時雨

家子侍

かいしきハるもかくなるのこ侍

口きり

口きりや是人間乃極そり

雪

雪はらわそくひる日部ふ

お弓ヶ嶽

宮巡りし用人はらまるお雪

雪

嵐もやゝ吉ふ雪乃松

吸筒乃竹先ゑ伝やゝ新の雪

孟子告子乃篇違ひ乃

むりなて

白い狐白日乃あとゝまる雪

京紙の附

ぞつとしてふわも宮ふ二の雪

水とり

船はゝゝ共まものいいぬをゝの鳥

雪

熱てゆい姿の深はゝや雪雪

焼炭

冬産業炭火の煙を初さゝ

松乃本ゝ枝ゝ伸りする庭宗

茶喰

郎やあゝゝをまゝぬ茶くむ

繰糸

わゝをれて白雲生まる金魚

蛭　お伽乃妹尾真彩

かきのゝ藁ゝすむ虫の

やとり小

俳句

俳の後史は花月とも称す

節分

樽櫂(未)くもさす来よ福の賓舟

赭(サニ)毋めりの鬼も忘るめり除夜の豆

歳暮

魚屋も陸よりとゝ歳暮るゝ

惟中吟　付合時事問

わさらの宮乃月沈り

のちゝはゝて忘り侍ん

身躰八関の為にすゝく

不節よりれやそねふ一筋

女うれこゝろゆるすな角兵衛

目と目とを源氏の無見合て

あゆすゝとてかけ乃傘に

鬼のやうふれ杖取なり

下の沈す早一口にとひてそ

又をつれ原会行乃縁

めゆゝ的あへむ也おはり

とつと其むかしの姿やゝ弱めん
火鉢ともしまされたる炭乃松
甘泉殿ゝ畳乃とふゝ迄
古雅むかしさ床をちはひ
産の羽さゝもゝ糸すき
素の弓八野乃鹿や逸めん
流つきておもひの外乃新八
重房多ゝうわゝ八月
三笠の山をはゝ紙業用
やゝい米あゝ下ゝ毎ゝ
むさんちゝ乃志野のゝ人
やゝくとゝられまし宗ゝ

毎ゝこの河乃はきいゝ
唐瘡ゝ三宝岸や前ゝん
ゝもゝれさゝ人のつきもの
ゝゝゝゝゝれきつきう狐ゝ
三番ゝ是八今日ゝ法祈ゝ
上様ゝ以紀ゝ為ゝ毎ゝ
やゝゝうゝ乃ゝゝゝ毎人
造作ゝ矢橋の浦乃わゝゝ
ゝゝの名所ものゝゝおゝ
伊達頂市浪間ゝきゝてゝはゝ
野のあゝし中ゝゝゝき
仍城ゝわゝ乃ゝゝ左敏中

我袖よ人こそとゝねたけぬき
なるやらあはゝくうきを名ゝん

松山路也無行の序

津の金を亭主おもふ
いやゝゝ蘭を筋家ゝ繞
月もろせうも乾躍坊
小被を里西て送佛杖もあり
判形を縦也身の弘陀
嵐戸やちとものたよゝぬふ
搗ゝ栗かゝ依佐自悦亭
出来させ行二人のむすめ
陸理よむゝ古家おはかりなる

山は肌非亭一時百部乃
行吟布を吐時
名のゝぬさきにうへてもとれふ
柄較を園生にうへてもとれふ
舟の乃清を世とあゝ如そ
八部ゝ黄帝これな百れゝ
五十布氏為吟ゝ
秘花よやよむ文ゝにすゝ絞
家生ゝ慈悲を為ゝ小皮
五人の孤そいゝつゝのゝ
雑巾て弁当をふく光島風
低ゝ元無行

旅用とゝて法住寺さん
現景その海いはうゝよりあり
二世あふとすむ下屋しき
栗柿もれ景の絵となるなり

桜葉は師匠真行

おもふやうよもふき出そし
麻姫のもとふゝ所ゝよ撞とむ
あゝふてやうよすゝくめんろく
竹篭やふゝすゝ冠をちゝん
君の代は茅屋ちゝて眺めて
うねてそうゝし 鮫鞘一本
松江 雅舟序

八十ちゝれたる慰そなき
あもこれ次堤の浪よ消行ひ
海ちひい稲荷の山れ山くゝり
疱瘡の月乃海とのしゝあふ
岩屋ハ注弟くゝはあきて
やまふゝ名はむ紙士の床
因幡芦氏撞 仇成亭
法華取ふろ宮乃黄鳥
仏城そその切妹の遊海よ行ち
山門よ入るゆるすきの風
うき世の氏を引いくのろり
伊木正休西岑

誰まちのひ緑樹の陰ならん
晩涼を追ぬめす人乃皮
相火をともしこれ精液ニて
夜れ撲やむ不盡そつて抜ぬらん
うき代の下ありてぬ細工
くらき胡墨そ天下太平

周か衣無紙り
浪のいたかりされいらくも
四手にも紙やらんて落すらむ

お作お津山
まさの夢乃気比ならふさ
銀一面皆とく人のゆふなり

岳亭儵及興行
徳ハまとなり海しけの中
白も黒もとんて驕らぬ甚ならて
此の国乃玉ハのるも珍蔵坊
花蝶捨りかあし生なり
播お新野羽吟行しと

吾吟
すいくらきハ谷の戸は前
れり米の衣はあ床も咲て
すね云をうの月はれ氣もなし
こちらへむかぬまてし子のも
まさぬ人をのろひすれ

密夫やあはれの乃道をしさらねとも
年のいまわひをそふれも
慰そうきはけすやうせにそり

同西服坂氏朴之亭

いはさすゝぬ志き　沼の左
書こめよ　ゆを垣はく原田地さて
出家も今そ　似城く原ひ
寺恩入無為乃起れ伊達こきよ

詩を作る心もちは新すす
推もゝてくも和撰坊さて
首よ和てる晴乃こゝね
弥勒乃世まゝ思き追副よ

文庫のみてまふき水うゝ
法動進さゝ浪よする志賀乃浦
作ゆそ藤灰俵子真紅
法慈悲を廣さむ内の原
八木乃ろさつも家まあま降を
あゝよはるもろこしの舟
はろゝと牡蠣をきれ炭ちて
志心いうさ函変化のはさん
よつりひやとはふつ生はめ

同西服部我氏真行

火工わゝく沼桜も立そひて
内番まんゝ原ゝのおまを

萩すゝき穴をんさう出
叡恵うり多ゝ　松むしの籠

志賀後直亭

痛きとき蕎生きるゆゝまれ
茶とハいはゝ一番さうの音
すゝ松をこめて出ふきこ人
樣相方米鳥の中青やそろん
らの元ふるものトの声
岡やいる松よ風呂のとひ栄
俳大荒れえ方真れ
ゑれさうそこの花ものの法
どゝやうねさゝもせみのぬけ

かゝいうら乃氣そいつて
かゝらまゝわゝざれはの五寸行
毎日乃すゝれをあ尓機き
人こみそ九ゐむの帳を押のけて
正井範孝真行
さゝかゝ乃市の久尓さ
焼魚を毎一ケとわゝ舟
毎ゝるむすふ潮のしゝ糸
お撰とゝて沈まゝる蕎すゝの河
讃岐方松一三真行
心あてゝの毎尓やのまんいゝ栄
きゝ西城いゝむ飛のあ乃山

兵粮と浪の初汐声立て
十三人乃友ちとりなを
回船大江賀氏亭
火宅乃門をせん河水
蕭条たる一てく截形し
平産をとて角て松戸な
角しくて伊黄菜乃鍋
回船上壹一止真れ
をちめき人形山なきた
銀杏子てをてう姉乃出く
強ほ乃ふ松を数とかふし
香車へてつれ壹山の色

乃ふえりき茨城湖
筆用のかこをはふふあ山
をちよう山見とき
芙蓉事腸をつ猛乃声
熟が西の原弘氏毒吟よ
いはくの私も持をあらん
筆用もてをちすみて好をすう
回とても目は見られぬ悟られ
放下り取しこ実相の後
来新ををやるはきや
演やきや世の中よ身はのう
はりくと分を紀しるすいぎよ

米うかねてはふきふ舟

月次の序

夫海つれる里をわまきうた

野よりふる山よりとゐる月水

なを心人うあえし花谷

中川に多多ものをぬきん出て

妙山舟浪のうねくおもひし

長さうりや生しなふらん

床ばら多付すてた方の浦

おくふ行をわふとこえく

自代をくふ綫の小る美

信濃ふむうを今は返すなり

奔走をするおもの去

破ヶ弓も根性骨もひきうて

京を明亭うて松江

雅舟万句奥行の序

うて

神々同えぬくひすの声

月うをおもひもいれを物の心

水のあてれふ小信度の西

業藏子は是も無考ひんを除

聖廟は乗の月は

高白よふれ雪をいうを

木孫うち勝よ神のうをうわ

おかのとしのつまのほ
ぐはなとかのしゝ山員さ名
出しふもむそこるはる
上京のやまもすそあまわて
くすふしぬ鉄ハあわはしや
小豆粒又ふよのようの大納言
大めす人のあてし花の戸
かゝ花見あるあとをすて
色てこふ金の砂乃時なる
はまさうをふしぬ春の苔
引こむ陶淵明ゝこゝろて
田園 海さとあ是嵐なを

宗芳養を春よすめら
れて意の百韻をせ
うちよ

話則をぬけしはひろの芋
取ぬりこ中棒をうちこみて
安藤よりこ取宿の汲書
なふハおとよあふてそのち
用もとにゝ夜ふとる塩をとこせ
一生法恵の脱くるひなわ

釋教物吟のうちよ

仏もふすひもさめるかゝち
拝ゝて貝相こ年二人お

変をさとりて世を山乃家
一声も十声もあきてとふかす
本来空よりの人ぞ
脱げらのおらんとふるむ世界

六百句

雲ゐ松にを住人二見ノ木
西行

椿寺人麿の貌
椿の寺は人丸ハ人すて人に
あらしとつとあらわし世の奇
ひらなる杉縁ゑ武の帝よ
はる人新田言市のまゝ子
あひぬよ野の山ゑ椿をもう
雲をみるは雲ふうをとや
いん明石の浦乃釣雲ゑ沼
くれ行舟をおもふ人
とやいん一生そ六義の故よ

あそひよ歳の五七五のうねハ
此人の面ゝ行如ゝしれされを
云の巻ハ生いつる文字ハこの
三十一文字の根ハ
こゝ有て今此俳諧をれ
むゝ

霧海一雲海入作て
名ありゝ

秋の頃下旬
ゝ和字ゝ敬の住人百氏
盈水好亦
宋湖天神堂東納

大大臣菅原の朝臣ハ参議
是善の家に南乃庭の隅
ゝ書ハ計の童すゝゝて
ひゝつゝ物ゝ学へゝけ人なり
是善ハ有てつゝすゝ
我子とせゝれ行ぬ天才ゝ
用ゝにゝ行ゝゝゝゝて名ハ道真
字ハ三とよゝれて詩賦文章
乃大祖父ゝ名ゝれゝおゝけふ
るあゝて昌泰四年正月廿日
大宰の権の帥ゝ左遷せゝれ
延喜三年二月廿五日ゝ

大ゐの月をわすれはてゝの
あかちゝ草ぬをやゝ今こゝの
東の沼ゝ一宇一カして
聖廟を造営せゝゝゝ
石田氏盆水氷のすゝ人や
ゝゝし余と他諸のゝゝゝ
あゝて考ようふはくのゝれを
ふ里を考ゝとゝして茶家
奔走の有弼乃俳諧の会句
を集れ余まゝゝて見よれて
すめゝれゆゆまゝいさゝの
事実をつゐてゝゝ高

すあゝゝゝ七夕なの句を添物
ゝするゝゝし
掛ゝも又乃ゝさゝの
余波亦

五月日

作州稲岳の庵詣生ちの
上人西宇
作州は山の名ゝゝゝて源立
上人のゝれゝ世のふ稲岳の庵
詣生ちとふ法寺ゝゝちゝ
上人自筆の名号ふゝに
内身絵ゝゝ因せる班白乃

髪毛のあらはるゝ間は修の
心法〻〻実ハ八宗の教乃
佛心宗ハわが九の教相り
をして粗密勝を均分ゆゑ
法法の法を要集せしめて
つゝ浄土を念乃宗を勧め
上人一代の事教一教起法
り所〻ハ建暦二年正月
廿五日の勅旨北面西にて
光明遍照の偈を誦し奉
奉しるゝ人家家感
して一句をはゝしりて一念

称名をゝへぬ
ばかりすゝし
もろ〻我弟の
初さ〻〻

三月廿日

播州龍野木下羽右衛士
所を
木下羽右衛ハ他流のすき
人にて西行ゝ詠せし
山田の原杉の下枝の郭公
ゝ声ゝ彷彿せして一度

とんぢ原作こゝにあるをもふ
れぬ書こゝや伊勢の国ふる郡
市長をゝ原ゝし家ゝ
おもふおもやつれ〳〵是ゝ
ゝ原太鼓のてん〳〵てん天
下皆これ〳〵てゝ
もの〳〵けよゝ〳〵に
木をつけものゝ
二月上旬
伯母岳山平氏記孝
文七おを

霊照女の孫賢
人のゝれ原ふゝゝもの城
洞庭の湯湯ゝ投捨〳〵れ
一切厳石士ゝむすめ天地
を分ゝ生死をいゝ
て毎方のさゝをぬゝれ
合掌左七のとゝふを
ごの　咄（トツ）
有ゝおいゝ
ゆゝふゝゝの毛筆
三月　日

盃石の記

玄の明神の　石の名

いつる代のいつるかつちよ
つと落てこのちんほをしき
石とあれるゐるむ　さこ
寸体らすい　横なりし宝の
しすまひ年のなりのかちち
そうのやまと　孫呼といへ
竜らいおけつへきものや山陰
すしあらて　ふちしまれ
やのかそくふひさ　ハ
ゐ法ゐ物ゐいつの時いつ

日ゐかりけ　玄の明神のやや
いん陶淵明とゐ名人ゐよ
ゐせそ又　音の琴を　といふ
ん主前公とふわちやえ
まこのゐうむゐ山ひ
こ乃琴を詠　丈へうん我ゐ
しぬ伊ゐの出宇广の琴
ゐ海男運ゐるあゐ海ゐん
ゐんのゐちまのゐハ心やゐくわ
して　金をとて　ゐのゐ
歌とゐゐむいゐゐ名をつ
けてゐ太郎ゐ郎まての家

の窓とせんたんを海よりとる
オよりけるいくちのうえもつ
うふゝ渭北春天の樹好
ふるゝをいとは日暮の雲と
杜甫ゝ作りしとゝわるもふい
とつゝをらぬのるゆきてたひち
てやゝゝ春の明月のとゝ
付ゝい梟のさゝきふる我
思の女乃高春の葉をや
ゝて母ゝと收めゝ前ふん
つゝ書いつれの面よりきう
ゝをまゝのゝとくちる急ゝゝ

されゝてゝとゝ雨ひとつ涙もの
ゝてゝ行ゝるゝのてゝち
くあゝゝ人も紙ものぼゝ
ゝてゝふるゝふんゝゝ
ゝよ雨ゝ

わゝふゝとゝ
春の山

三月皆あゝゝ七日の
日よ一附將下よをいて
記子

延寶五丁巳年霜月吉祥日
深江屋
太郎兵衛
行

昭和十三、六、六 校了

87